

『今月の天候と農作業』

通巻第5547号
9月号
平成24年8月31日発行
宮崎県
宮崎地方气象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	30	30
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	30	40

【概要】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

〈1週目の予報〉 9月1日(土)～9月7日(金)

天気は、気圧の谷や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、雨の降る所があるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、平年並の確率50%です。

〈2週目の予報〉 9月8日(土)～9月14日(金)

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

〈3週目から4週目の予報〉 9月15日(土)～9月28日(金)

天気は、数日の周期で変わるでしょう。

普通作物

◆普通期水稻

出穂期を迎え仕上げの管理の時期です。圃場ごとに生育や病害虫の発生状況など良く観察し、最後まで適正な管理に努めましょう。

1 水管理

「ヒノヒカリ」や「おてんとそだち」は乳熟期にありますが、根の活力を保つために間断かん水とし、晩生種の「まいひかり」は、出穂期頃にありまので湛水状態を保ちます。

出穂後の台風は、倒伏や稔実不良など甚大な被害を及ぼします。台風接近時は深水とし倒伏の軽減を図り、通過後も吹返しの乾燥風で玄米の登熟障害が発生する場合がありますので、しばらくは湛水管理を保ちます。収穫5日前までは間断かん水を続けましょう。

2 病害虫の防除

今年は県内全域でウンカが多く発生していますが、現在、坪枯れを起こす「トビイロウンカ」が急激に増殖しており、要注意です。防除情報をもとに基幹防除はしっかり行いましょう。その後も油断せず株元を良く観察し、ウンカの発生密度が高い場合は、臨機防除が必要です。9月は秋冷とともに「穂いもち」が発生しやすい気候です。特に山間地や葉色の濃い水田では激発しやすいので、地区の暦を参考に遅れないようにしましょう。「カメムシ」加害による斑点米での品質低下は毎年多く発生しています。防除は穂揃期とその7～10日後の2回は基本ですが、それ以降もカメムシの発生に注意します。農薬散布に際しては、防除基準等を遵守し、周辺に十分注意を払い危被害防止に努めましょう。

◆大豆

大豆は湿害に弱いため、日頃より排水対策を徹底します。

開花期から幼莢期にありますが、「紫斑病」や「カメムシ」の防除時期になってきます。「ハスモンヨトウ」は老齢幼虫になると薬剤防除の効果も劣るので、観察に努め早めに防除を行います。特に孵化後間もない幼虫が食害した際に発生する白く透けた葉を見つけたら、幼虫が周囲に広がる前に処分することも大切です。

◆そば

排水対策

そばは湿害には弱く、降雨後に長時間滞水や冠水すると生育不良や立ち枯れ等を起こしますので、排水溝等を設け徹底した排水対策を行いましょう。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆共通事項

施設野菜ではきゅうり、ピーマン、トマトなどの定植が始まります。育苗期の後半は、鉢ずらしを行ない、がっちりした苗に仕上げます。鉢ずらし後は乾燥しやすいので、かん水不足に注意します。

また、これらの苗は適期に定植することが重要です。台風や降雨の多い時期となるため、ハウスの定植準備は計画的に余裕をもって行います。

定植前のかん水は、定植の5～7日前にかん水チューブを利用し、畦全体が湿るように十分行います。定植前には根が深く伸長するよう植え穴に十分かん水を行い、定植後は活着促進を図るため株元を中心にかん水することが重要となります。なお、定植前のかん水量が不足していると根張りが不十分となり生育や収量に大きく影響しますので、中期展張ハウス等のビニルが被覆されている場合は注意が必要となります。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培の定植期となりますが、定植後から収穫開始期までの管理により草姿は決まります。根を十分に張らせコンパクトな草姿に仕上げることが、収量、品質向上につながりますので、定植後は株元中心の手かん水を行い、活着後はかん水制限により徒長しないよう草勢調節を行います。

◆ピーマン

接木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向がありますので、若苗での定植を行い、かん水についても定植後から収穫開始時期までかん水量を3～4割増やすなど草勢を強めに保つことが必要となります。

◆いちご

さがほのかは、花芽分化に対する窒素濃度や苗令の影響が少なく、花芽分化が揃って早いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期は9月10日頃であるので、その2～3日前から検鏡を行います。花芽の確認後、9月中旬以降に定植します。なお、採苗が早く育苗

期間の長い苗から順番に行い、炭疽病等の恐れのある苗は除去します。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

9月はキャベツ、はくさい、ほうれんそうなどの葉菜類やだいこん、水田ごぼうなどの根菜類のは種や定植期となります。水はけの良い、地力の高いほ場を選び、植え付け時に適度なかん水を行い初期生育を促すことが重要です。

また、病害虫では生育初期にネキリムシ等鱗翅目害虫が多く見られます。地温も高く雑草の発生も多いので除草対策は重要になります。

◆にんじん

にんじんは間引きの時期を迎えます。株間は8 $\frac{1}{2}$ 程度を目安に年内出荷はやや広めに、年明け出荷はやや狭くして有効株数を確保し収量アップを図ります。干ばつによる発芽不良や雨による流失で欠株が多い場合は、まき直しを行いますが、地域によりやや差はありますが今年20日頃がは種の限界となります。

◆じゃがいも

秋作の植え付け時期となります。種いもは10 $\frac{1}{2}$ 当たり200kgが必要です。通常、60～80gのいもを縦割りにして使います。切断は植え付けの2日前に行い、日陰で切断面を乾かします。植え付けは切断面を下にし、8～10 $\frac{1}{2}$ の覆土をします。また、マルチ栽培は植え付け時の地温が高すぎて欠株が多く生じやすいので植え付け時期を遅らすなどの注意が必要です。

◆食用かんしょ

普通堀の収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなります。鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発しやすいので、収穫予定日を考慮して農薬防除を行います。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆温州みかん

今年は極早生温州みかんの減酸が早く、既に収穫が始まっている地域があります。収穫は、樹上選果を行いながら、着色や果汁成分など、地域の基準に基づいた出荷を行いましょう。

収穫後は、樹勢回復のための施肥やかん水、葉面散布が必要となります。

収穫が早い園では、秋期の高温の影響で、収穫後に秋枝が発生し、翌年の着花に悪影響を及ぼす事があります。9月中旬までに収穫を終える園地では、10月以降、秋枝が発芽しなくなった時点でマルチの除去やかん水などを実施しましょう。

◆完熟きんかん

今年は7月中旬に開花した花が、多くの地域で結果しています。良好な初期肥大を確保するため、9月末までに摘果を終了しましょう。

夜温が早く低下する中山間地域で、果実肥大が遅れている園地では、9月下旬から10月上旬にビニル被覆を行い、外気温よりも3℃程度高い温度で加温することで、肥大を確保しましょう。

◆マンゴー

今年は日照不足で、枝の緑化が遅れています。また、9月になると、日射量は真夏の4分の3程度になり、枝の緑化にはさらには不利な条件になるため、内カーテンや遮光カーテンを開放し、十分な日照を確保しましょう。枝が多すぎるのも緑化を遅らせる要因の一つです。混みすぎた枝は早めに整理して、日当たりを良くし、葉面散布を徹底することで、緑化を進めましょう。枝の緑化が遅れている園地では、外気温が20度以下になる9月下旬から加温を行うことで、緑化を早めましょう。

2 落葉果樹

◆くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。

収穫・出荷に当たっては、早朝に収穫することで、品温を低く保ち鮮度保持を図りましょう。また、家庭選別を徹底し、実炭そ病や果実害虫の被害果の混入を防止しましょう。

3 果樹全般

◆土壌診断

不適正な土壌は、根の生育不良を引き起こし、収穫後の樹勢回復を阻害します。収穫後は土壌診断を実施し、適正な施肥や土壌改良を心がけましょう。

(山口和典)

花き

◆秋ギク

「神馬2号」、「神馬66-4」の10月出荷作型の再電照は総苞りん片形成

後期から4日間実施します。目安として消灯後12～14日後ですが、地域や当年の気候で変動がありますので、農業改良普及センターまたはJAにおいて「花芽分化検鏡」を必ず行った上で実施してください。

直挿しする穂は、低温伸長性を高め節間伸長や生育の揃いを良くするために2～4℃で穂冷蔵を行います。「神馬」系統は穂冷蔵を長期間実施すると、開花遅延が発生しますので、冷蔵期間は3週間程度にしましょう。

「神馬66-4」は、高温の影響を受けると従来の「神馬系統」よりも腋芽が出にくい特性があります。9月以降も残暑が続きますので、必要に応じてBA剤の散布を行うとともに、親株ほ場はできるだけ涼しくなるよう管理して下さい。

◆スイートピー

冷蔵が終了した種子は、活着不良を避けるために遅くとも出庫後3日までは植え付けましょう。また植え付けから1週間は、乾燥しないように綿密な水管理を行ない、その後は徐々にかん水間隔を広げて根の張りを良くして下さい。1ヶ月程度は、ベッド全体が十分湿るようなかん水を行って下さい。

植え付け時期の遮光は地温の上昇を抑えるため植え付け前から実施し、植え付け後7～10日は寒冷紗で終日遮光し、その後は天候に応じた遮光を行って下さい。長期の遮光は軟弱徒長となりますので気を付けて下さい。植え付け直後と摘心時には殺菌剤をかん注し、立ち枯れ病を予防して下さい。日中は循環扇等を利用し施設内の環境改善に努めるほか、高温時はミスト等で気温低下を図るのも有効です。

◆デルフィニウム

沿海地域の年内出荷作型の定植期になります。定植時にハウス内温度が高いと早期抽だいするので、定植前に寒冷紗等で遮光すると共に十分にかん水を行って下さい。

中山間地域で8月に定植した作型では伸長時期から抽だい時期になります。発蕾までにボリュームをつけることが大切ですので、定植から抽だい後2週間ぐらいまでは定期的に液肥を施用します。また必要に応じてカルシウム資材の葉面散布を行ってください。

いずれの作型でもうどんこ病の防除は徹底して下さい。

◆ホオズキ

白絹病やその他の立ち枯れ病、ウイルスが発生したほ場では、出来る限り残渣をほ場外に持ち出して焼却し、ほ場に残った細かな残渣については、堆肥を散布し、耕うんの繰り返しと適湿な土壌水分管理で十分な腐熟を行います。

(中村 広)

畜産

◆家畜

今月に入っても残暑が続きますので、家畜への暑熱対策は引き続き実施しましょう。

一日の寒暖差が大きくなるとストレスにより、夏バテ気味の体力の低下した家畜では、繁殖成績、肥育成績の低下が懸念されます。こまめな観察による疾病の早期治療や、良質の飼料を回数を増やして給与するなど、家畜の体力回復に努めましょう。

9月から10月にかけては温度、湿度等ハエの発生しやすい条件が揃う時期です。次の対策を行って秋バエの発生を防ぎましょう。

- 1 発生源対策として畜舎内の清掃により、ハエの産卵する新鮮な糞や、残った飼料はすみやかに取り除きましょう。
- 2 ハエの卵は温度40℃以上で死滅し、水分50%以下で孵化率が急激に低下すると言われています。堆肥は温度を上げるために、適正な水分調整とこまめな切り返しに努めましょう。
- 3 ハエは1回に50～100個の卵を産むと言われています。幼虫期や卵期の対策が効果的です。発生源に昆虫成長抑制剤などの殺虫剤などを定期的に散布しましょう。
- 4 ハエが大発生したら、成虫用殺虫剤を家畜や鶏卵に直接かからないよう畜舎内に空中噴霧し、次に食毒作用のある殺虫剤をハエがよく止まる場所に塗布しましょう。

◆飼料作物

今月から秋冬作の飼料作物の作付けが始まりますが、毎年、未熟堆肥の過剰施肥により収穫時に硝酸塩含量の高いイタリアン等が確認されます。牛の硝酸塩中毒を防ぐために、散布前の堆肥の成分分析と適正な施肥方法について近くの農業改良普及センターに相談しましょう。

(小坂昭三)

特用作物

◆茶

今年は降雨が多く、地力や樹勢が低下していることから、これからの作業は、来年の一番茶の収量・品質の確保のために大変重要となります。

1 秋肥の施用と土づくり

秋肥の施用時期が遅れると、耐寒性が低下し秋冬期の急激な低温により、寒害(幹割れ、芽つぶれ等)を受けやすくなりますので、9月上旬までには施用しましょう。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに堆肥を1～2ト^ン施用し、深耕を行い、土づくりと発根促進による肥効率の向上に努めて下さい。

2 病虫害の防除

クワシロカイガラムシの幼虫がみられる茶園では、ふ化最盛期に、専用ノズルを用いて枝幹部に確実に薬剤がかかるように防除して下さい。

秋芽が硬化していない茶園では、連続した降雨等により葉の濡れ時間が長くなると炭疽病やもち病が多発生しますので、一葉期頃に予防効果の高い剤を、三葉期頃に治療効果の高い剤を散布します。また、秋期に多発生するチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ等の吸汁性害虫やハマキムシ類も同時に防除しましょう。

(佐藤邦彦)

◆しいたけ

1 原基(げんき)づくり

9月から10月は、菌糸の塊が肥大生長して、しいたけになる原基の形成が盛んな時期です。原基の数がしいたけの発生量に大きく影響しますので、原基の形成促進のため、光の確保に加え、十分に散水を行うなどほだ木の水分補給に努めましょう。特に古ほだ木は、天地返しやほだ回しを併せて行うとより効果的です。

2 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、南～東南斜面の常緑広葉樹林が、また、風当たりが弱く湿気が多いところなどが適しています。スギやヒノキ林のほだ場では、林内が暗くなりがちなので、間伐や枝打ちを行い林内を明るくし、光や降雨の入りやすい環境にするとともに、風の強い場所では防風垣を設置するなど環境改善に努めましょう。さらに、従来からのほだ場を使用する場合は、害菌による被害木や古ほだ木を撤去しましょう。

(小田 三保)

◆葉たばこ

今月の作業は、通常期販売に向けての出荷規格の確認と来年作に向けた準備が主な作業となります。

1 出荷前には必ず最終確認として、異物・水分・異臭の確認と土砂付着や腐れ等の手入不足がないか包全体の確認を行いましょう。

貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないか確認を行いましょう。発生を確認した場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行って下さい。確認作業は、晴天日に行い、吸湿防止に努めて下さい。

2 良質葉を生産するには、土壌条件と環境条件、また病害発生のおそれがないほ地が必要となりますので、たばこ作に適したほ地選定の確保に努めましょう。

3 病害の耕種的防除のためにも夏期深耕を行い立枯病等、土壌中の病原菌密度低減や土作りに努めましょう。

4 良質堆肥10畝当1200kg以上の使用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう。

(井上 馨)

内容の詳細について

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

なになに農業アラカルト

農作業事故をなくそう！

本県ではここ数年300件以上の農作業事故が発生しており、そのうち死亡事故は10数件発生しており、毎年尊い命が失われています。

農作業事故は、生命の危険とともに、農業経営や農家生活全般にも大きな影響を及ぼすことから、事故を未然に防止し、農作業安全に努めることは極めて重要なことです。

◆事故の主な原因

直接的な原因は、機械や人の転落や転倒によるものが多く、この他にはひかれや挟まれ、草刈機等の刃器類との接触、さらに家畜による蹴られや踏まれなどがあります。

◆ 農作業事故の傾向

年齢別には、60才以上の割合が6割程度を占め、高齢者が多くなっています。

月別の事故発生状況をみると、年間を通しては植付や収穫作業が集中する時期が多い傾向にありますが、1年を通して事故は発生しています。また、時間帯別には午前8時～10時間と、午後2時～4時が多くなっています。

農作業事故のうち、約4割は機械によるもので、特に死亡事故は、トラクターや運搬車、軽トラックなどの大型の機械操作中が多く、しかもほとんどが高齢者となっています。

◆ 農作業の安全対策

作業前には、十分な睡眠での健康管理や、ゆとりのある作業計画の樹立、農機具や機械の整備点検に努めます。

作業時は、作業に適した服装とし、必要に応じヘルメットや防護メガネを着用します。機械操作時は、圃場や路肩では不安定な場所も多いため、安全確認を十分行います。連続作業では注意力も低下しますので、適度の休憩をとります。機械の点検時はエンジンを必ず停止してから行います。この他、農薬散布においては使用基準に基づいた適正使用はもとより、子供などの第三者の誤使用や持出しのないよう保管管理も徹底します。

農作業安全研修や講習会が行われる際には、積極的に参加し、操作知識や安全意識を高めることは大切です。この他、農作業でヒヤッとした体験をしたら、その原因を振り返って、みんなで共有し対策を講じることが、大事故の発生を防止するためのポイントです。

9月からは「秋の農作業安全運動」期間として、農作業事故防止に向けた啓発活動を実施しています。地区内や家族内で日頃から声を掛け合い、事故

防止に努めましょう。

(鎌田 博人)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	穂いもち 紋枯病	やや多 やや少	穂いもちの発生状況は、発生面積率がやや高い状況です。穂揃い期の防除を徹底します。
	トビイロウカ ※※ (秋ウカ) 斑点米カメムシ類	多 並	トビイロウカの生息数が急激に高まっており、警報を発表しています。ほ場全体の発生状況の把握に努めるとともに、成虫・幼虫ともに株元に生息しているので、株元まで十分農薬が到達するように防除します。 斑点米カメムシ類は、穂揃期とその7～10日後の2回防除が基本です。残存虫が多い場合は収穫前使用日数等に注意して追加防除します。
大豆及び 野菜類	ハスモンヨトウ等チョウ目 (鱗翅目)害虫	並	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
施設果菜類	ウイルス媒介虫 (アブラムシ類、アザミヤカ類等)	－	ウイルス病は生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。アブラムシ類やアザミヤカ類などは種々のウイルス病を媒介しますので、施設開口部への防虫ネット設置や定植時の粒剤施用などの防除を徹底します。
	タバココナジラミ類	－	県内ほぼ全域で、各種薬剤に対して感受性の低い(薬剤の効きにくい)バイトタイプQが、優先して発生していることが確認されています。薬剤のみでは防除が困難ですので、防虫ネットや粘着板等を組み合わせた総合的な防除対策に努めます。
	キュウリ黄化えそ病 (MYSV)	－	シキイロアザミヤカによって媒介されるキュウリ黄化えそ病(MYSV)が、一部地域で確認され、徐々に拡大傾向にあることから注意が必要です。
	土壌病害虫	－	今年は梅雨明けが遅く、またその後の天候も不安定であったため、太陽熱消毒を実施したほ場においては効果不足が懸念されるので、必要に応じ薬剤防除を行います。
促成イチゴ	炭疽病※、萎黄病等	－	罹病苗の持ち込みは、本ほ内での感染源となるため健全苗のみ定植します。苗床で発病した苗に隣接している苗(半径3ポット程度)は、感染苗と見なし廃棄します。 苗からの持ち込みによる「うどんこ病」や「ハダニ」の発生が多く見られるので、定植前に防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	－	うんしゅうみかんでは、着色期の加害は落果を生じやすいので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	かいよう病 黒点病	並 やや多	かいよう病は、台風等による枝葉の損傷等により発病が助長されます。薬剤は、事後より事前に予防的に散布する方が効果的です。
	ミカンハダニ チャノキイロアザミヤカ	並 やや少	ミカンハダニは、平年並の発生ですが、寄生葉率30%または1葉あたり虫数0.5～1頭の発生初期に防除を行います。
茶	炭疽病 ※ もち病 輪斑病	やや多 やや多 並	炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2～3回防除します。もち病は、中山間地での発生が多い状況です。
	カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノボリガ チャノキイロアザミヤカ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカイガラムシ	並 並 並 やや多 やや少 並 並	カンザワハダニは、低密度での防除に努めるとともに、薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノボリガは例年9月以降に増加し、また、この時期は秋芽の伸長期であるので、今後の発生に注意します。 チャノキイロアザミヤカのこの時期の発生は、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくく防除効果があがらないので、残効性の長い農薬か1週間間隔での連続散布を行います。
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※※は警報、※は注意報を発表中です。詳しくはホームページをご覧ください。病害虫防除・肥料検査センターホームページアドレスは、http://www.jpnn.ne.jp/miyazakiです。</p>			